



Photo by Ryosuke Takahashi

平仮名の名前にどんな意味を持たせるか——スポーツから国際政治まで幅広くカバーするジャーナリスト

—— 今月は、いま多方面にわたって活躍されていらっしゃる野中ともよさんをお迎えいたしました。まず、ご自身の英語体験と言いますか、これまでどんなふうに英語と接してこられたのか、お伺いできますか。

野中 私自身は、学校の勉強ということで言うと、英語は嫌いだったんです。私の父は外資系の仕事をしていて、マインドもそうでしたが、英語は日本語と同じくらい堪能でした。その昔、そのころの英語ができる学生を集め、

同時通訳のコンセプトを教えたこともあったそうです。小さい頃、父に怒られると、途中から彼は英語になってしましました。小さい身としては馬耳東風でしたけど。(笑) ですからアルファベットや英語の音は、比較的小さいころから周りにあったことはありました。それから私のおじが国連の職員だったこともあって、おじが帰ってくるときは、バービー人形とか絵本を買ってくれましたが、開けると立体になっている絵本は全部英語でしたし、音

まずは自分の井戸を見極めること

野中ともよ

Tomoyo Nonaka

が聞こえてくるカセットもそうでした。私の名前は平仮名で「ともよ」ですが、父からは「きみが大きくなったら、世界中のいろいろな人たちが『オーマイ・ディア・フレンド』と呼んでくれるような世の中になってほしいし、そういう世の中づくりに貢献できるようなパーソナリティになってほしいな。漢字になると人生の意味を親がつけてしまうことになるから、音だけの平仮名にする。共に世界を作ろうという『共世』や『共代』でもいい。あとはきみの人生だから、漢字の意味はきみがつけなさい」と言われました。

—— それはいいお話ですね。

野中 それで公立の中学に入つて“This is a pen.”と読むと、あまり先生のお気に召さなかったようで。(笑) その先生は「ジス・イズ・ア・ベン」とまさにカタカナ式に読むわけです。順番に当てるときを飛ばして読ませたり、嫌でしたね。だから中学のときは、眞面目に英語の勉強をしようとは思わなくて、かえって嫌いになってしましました。ところが、その先生ではなくて代用教員というんでしょうか、3ヵ月間ぐらい、大学を出たばかりで、若くて優しい女の先生が来てくださいました。NHKの『基礎英語』をやってみましょうと言って、私が読むと「本当にきれいに読めるわね」なんて言ってくださった。こうして、新しい教材や映画を見てことで英語に触れ合うようになって、おもしろくなってきたのが中学の最後のころです。

—— 上智大学ではジャーナリズムのご専攻で、そのあとアメリカの大学

Messages from the Person of This Month



院に行かれましたね。

野中 ニューヨークではなくてミズーリ・コロンビアです。自慢するわけではありませんが、ジャーナリズムに関しては、ニューヨークのコロンビアよりもいいんです。自慢していますけれども。(笑) アメリカでは毎年スクール・オブ・ジャーナリズムのランキングが発表されるので、プラクティカルな教育にものすごく力を入れています。国家の成り立ちとして、ジャーナリズムがきちんと機能していなければ国はうまく行かないという考え方があるんでしょう。第三者機関ですが、先生方の論文や卒業生の就職先での活躍など、いろいろなものを合わせて、全米のラ

ンキングを発表しています。ニューヨークのコロンビアにはほとんど負けたことがないんじゃないでしょうか。特にフォト・ジャーナリズムではアメリカでいちばんです、というのが先生方のご自慢でした。

——よく言われることですが、こちらの大学院の勉強はかなり大変だったんですか。

野中 聞くも涙、語るも涙ですよ。(笑) それこそ夜の12時前に図書館から帰ってきたことがないぐらいでした。リーディング・アサインメントが1週間に1回出ますが、大学院の生徒が6人ぐらいで、先生から「はい、来週までのリーディング・アサインメント。読んできてね」と言われると、先生の授業だけじゃなくてほかにも取っているんだからと思っても、もらったらその足で図書館に行かないと、みんな借りられてしまいます。だから、とにかく足は速くなりました。(笑) それで、とりあえず本の目次をコピーします。読解力より洞察力がついたのではないから。(笑) まずイメージを組み立てて、テーマに必要なところをピックアップして、そこはじっくり読みました。

とにかく極寒の中の生活でしたが、本当にあのキャンパスに行ってよかったですと思います。周りには新宿もなければ渋谷もなく、図書館だけが鎮座しまして、しかもコミュニティとしての生活がある。そこへぶち込まれることは、たとえばロサンゼルスのように日本人がいっぱいいる留学先とは違うと思います。

いうのは英語がしゃべれることであったり、英語圏の連中とコンプレックスなくハローと言えることで、そこばかりにフォーカスが当たってきました。

言葉は道具だと思います。道具づかいがうまければいい家を建てられますから、使えないより使えたほうがいいに決まっていますが、大工さんをめざす人がノコギリの道具をどう使うかというのと、「うちはもう大工さんに頼むのよ。だけど犬小屋を作ったりするのは楽しいじゃない」という人が、ノコギリづかいを習うのでは当然違います。

——では、この地球時代に共生と言いますか、日本人が世界中の人と一緒に生きていくために、何が求められるのでしょうか。

野中 私は「井の中のカワズに、まず、おなりなさい」と申し上げています。世界中の人類という存在は、全員が井の中のカワズです。それぞれ井戸があって、カワズとしての命を頂戴して、「空が青いぞ。天下は太平だ」と思っているわけでしょう。まず、自分の井戸、つまり居場所がなんであるか確認することから始めることです。私は自分が同心円の中心にあると思っていますけれども、家族といういちばん人類の最小限の仲間の集まりが、コミュニティになって、地方自治体になって、国家になっていく。あるいは少しディメンションが違うところでは、職場とか、学校とか、親族というつながりがあるかもしれません。そう考えると、まず自分を作ってくれた井戸をよく確認することです。心酔する必要はないですが、それを愛したり、誇りをもつたり、そのどこがいけないのかを確認をする。井戸をだんだん上がって、ポッと顔を出すと、違う世界が出てきます。

英語という道具に触れて何が学習できるかというと、1人称にはI(アイ)しかないことです。だれと対峙してもIはIです。英語という道具と付き合ってみると、そういうことを教えてくれます。そして、英語では社長に対してもyouはyouです。日常のコミュ

「国際人」よりは、共通の物差しを持つ「地球人」として

——そういうところで異文化体験もされたと思います。野中さんからご覧になって、いま日本人に求められている国際感覚はどんなことだと思いまですか。

野中 まず国際人という言葉を、ゴミ箱に捨てたほうがいいと思います。そして何を持ってくるかというと地球

人 本来あるべき国際人のコンセプトは、地球人という単語を持ってくるとより鮮明に見えてきます。つまり地球は1つの星です。人類皆兄弟ではないですが、どこへ行こうと等しい命の重さで、1997年のいまというモーメントを等しく共有しています。

日本の戦後は、国際化とか国際人と

Messages from the Person of This Month

ニケーションでも、相手によって動詞から何から全部変えることが要求されているのが、われわれの日本語であるということも、英語という道具と会うことで見えてきます。そういうかたちで日本語という井戸を確認するためにも、違う人と会うことはとてもおもしろいと思うのです。

おしゃべった質問の答えになるとすれば、まず地球人としての自覚を持つことです。井の中のカワズになって、

自分の井戸をよく研究して、愛して、自信を持つ。「みんな井の中のカワズなんだから、ゴチャゴチャ言わないで、生きていてよかったと言おうよ」と言うためには共通の物差しが要ります。

私は1つだけ共通した物差しがあることに気がついたんです。それは命という物差しです。これはだれもが共通に持っていて、人類は昨日よりも今日、今日よりも明日、どうやったら幸せになれるんだろうと思って生きています。

相手を不愉快にさせないことがコミュニケーションの基本

—— 小誌の読者の方々に英語学習上のアドバイスをお願いします。

野中 好きなところに英語を引っ張り込むことです。お料理が得意な方は、お料理のことは自国語で引き出しがいっぱいあります。「好きこそもの・・・」というのは本当に真実です。嫌いな上司にあいさつに行く場合とボイフレンドとデートをする場合では、その姿勢も全然違います。道具づかいですから、できてもできなくても人格がどうこうという世界ではない。そんな大それなものではありません。

ポルノグラフィーがお好きだったらそういう本を教科書にすれば、だいたい何をするのかわかるでしょう。そうすると、ベッドに入ったというのはどういう言い方だとわかります。わからない単語は、どんどん下に赤線を引っ張っていきます。辞書を調べなくてもいいんです。その代わりカギになる単語があったら1ページで3つまで引いてご覧なさいとか、1日1個でいいから引いたらどうですかと言います。

いずれにしても、楽しさのインセンティブがないと続きませんから、そういうことをやりになるのがよろしいのではないかでしょうか。

—— 日本人は日本人のメンタリティを持っているわけですが、英語という違う文化を持った言語でコミュニケーションを図るときに、どこかでスイッチの切り替えみたいなことはされま

すか。

野中 英語をしゃべった途端に自動切り替えです。(笑) 私は根本的に自分もその方と会ってよかったと思いたいし、相手にも思っていただきたいわけです。その上に、仕事で私に課せられるタスクがあります。たとえば相手がカール・ルイスで、レースとレースの間のハイテンションのときの3分半しか時間をもらっていないくて、カメラを回してインタビューをしなければいけないというときには、「よろしく。私は日本から来て・・・」なんてやってられない。"Good job!" と入ります。プロとして、どのようにコミュニケーションを図るかは、その人の背景、前後左右の状況から見極めなければいけません。

それを見極める千差万別のケースの中で共通しているのは何かというと、相手にとって不愉快であってはならないということです。水は高いところから低いところへ流れますが、コミュニケーションで相手に気持ちよくしゃべってもらうには、こちら側が下がることです。それはへりくだるのでなくして、相手にとって気持ちのいい高さで、プレゼンテーションしてあげることです。レースをしてきてテンションが高いときに、「どこが悪いと思いましたか」と聞かれたら、この野郎と思うでしょう。

—— 現在、いろいろな審議会の委

員もされていますし、シンポジウムにもお出になつたり、お忙しいと思いますが、これからの抱負をお聞かせいただけますか。

野中 私自身、あと100年は生きられません。私が賞味期間として持っている時間、おいしくいただいてもらえる時間はそんなに長くはありません。あと5年とか10年ではなくて100年はないという意味です。表に出た途端に車に轢かれてしまうかもしれません。ですから、野中という社会的なプレゼンテーションを通して地球はちっぽけな星だけど、赤い顔も黒い顔も、いろいろな人たちがいるから、人生はおもしろいというメッセージをお伝えできればと思います。

個人レベルの夢ということで言えば、世界中のいろいろなところで生活をして、それこそおばあさんになってもカメラをつついでいろいろなところを撮りたいと思います。そのころになれば、300チャンネルも500チャンネルもできて、こうもり傘のようなバラボラを使って自分で中継できると思いますから、いろいろなところから「ハロー」とリポートを送って楽しんでいきたいと思います。

—— そういう夢が実現することをお祈りしています。ありがとうございました。

PROFILE



(のなか・ともよ) 上智大学文学部新聞学科卒業。同大学院文学研究科博士前期課程修了。米ミズーリ・コロンビア大学大学院へ留学。フォトジャーナリズムを学ぶ。NHKおよびテレビ東京のキャスターを務め、現在、中京女子大学客員教授。官公庁の各種審議会のメンバーとしても活躍中。主な著訳書に『アイアン・ジョンの魂(こころ)』他。

1997年12月1日発行（毎月1回発行） 第52巻 第9号 1945年12月13日第3種郵便物認可

時代をつかむ英語マガジン

特別増大号

時事英語 研究

THE STUDY OF CURRENT ENGLISH

12

DECEMBER 1997

特集 もっと知りたい資格試験の英語

岡田成文

〈特別記事〉サンディエゴはサッカー・マムが大流行



卷頭インタビュー

野中ともよ

映画シナリオ

『NY検事局』

研究社90周年愛読者プレゼント

本誌の月刊カセットテープ

ソノパック

(別売)

KENKYUSHYA